

# エマソンの「歴史」と「自然史」

## —— Emerson's Redefinition of Natural History ——

小 田 敦 子

(Atsuko Oda)

Ralph Waldo Emerson の最初の著作 *Nature* (1836)は、人間の「精神」を探究する試みに、「自然」というタイトルを冠した。「自然」を名乗りながら、「霊」を結論とするエッセイは読者を混乱させ、汎神論的、無神論的性格が論争的となった。B. L. Packer はこの「自然」と「霊」との対置の背後に、両者を対立的に捉える Coleridge の用語法を見、エマソンのタイトル「自然」が「自然と霊」と同じ意味を表現するとみなした点で、コールリッジの用語法が覆されたと指摘している。<sup>1</sup> そのような用語の変容は“Natural History”という語にも見られるのではないかということを、エマソンの詩を翻訳するときに「時」、「時代」、「時機」、「音楽の拍子」などの意味の重層性を訳しきれなかった “Woodnotes II” はじめいくつかの詩で使われる“time”の観念の重層性に通底する問題として、“history”の意味の重層性を考えてみたい。

“Natural History”という語の日本語訳として、現在では「自然史博物館」などに見られるように「自然史」という訳語が使われることがある。しかし、元々は「博物学」、「博物誌」などと訳されていたように、“Natural History”の“history”に「歴史」の意味はない。現代では natural history など限られた場合に使われる「時間にとらわれない自然現象の組織(体系的)的記述」(『ランダムハウス英和大辞典』)を意味する。しかし、エマソンについては、ここにも「歴史」の意味を読み込んでいるのではないかということは、エマソンがリンネの類似する生物の差異に基づく分類学を批判し、『植物変態論』の著者でもあるゲーテの、すべての植物はひとつの「原植物」から発展したものだという進化論にも通じる「変態」の考えや、植物の成長など自然現象を人間が観察する際

に生じる植物と人間の相互性への意識に関心をもっていたことから推測される。<sup>2</sup> そして、この自然現象が「進化」していく時間は、*Essays: Second Series* (1844)の中のエッセイ “Nature” では、“the secularity of nature”(546)<sup>3</sup> という言葉で、地球の発生に始まる自然の「長大な周期性」をもった時間として認識されていることが明言される。イギリスの地質学者たちが普通は “immense” 或いは “vast” と形容した時間をエマソンは “secular” という天文学の用語でもあるが、<sup>4</sup> 近代英語で長く今も使われている意味としては「名声や傾向が長期にわたって続く」であり、同時に、「世俗の」という意味でもある言葉を使った。それは最初期の講演の一つである “The Relation of Man to the Globe”(ボストン、1834年)で、聖書の6000年の歴史以前の、人間の広大な「前史」を語る講演のまとめとして、“the slow and secular changes and melioration of the surface of the planet”と「ゆっくりとした長年にわたる変化」に言及する際にすでに使われている言葉である。<sup>5</sup> エマソンの *Natural History* には、パリ植物園で「サソリとの間の神秘的な関係」に打たれたエマソンに「博物学者になる」と決意させた体験の、その進化論的な関係の感覚が含まれており、従来の *Natural History* にはない時間に関わる意味があることを示唆する。

エマソンがヨーロッパ旅行から帰国して、最初に行った講演はボストン博物学協会に対する“The Uses of Natural History”であった。挨拶に続いて、エマソンは以下のように語る。

It seems to have been designed, if anything was, that men should be students of Natural History. Man is, by nature, a farmer, a hunter, a shepherd and fisherman, who are all practical naturalists and by their observations the true founders of all societies for the pursuit of science. And even after society has made some progress, so that division of labor removes men into cities, ... everyman ... is compelled to pick up in his own experience, a considerable knowledge of natural philosophy,---as, an

acquaintance with the properties of water, of wood, of stone, of light, of heat, and the natural history of many insects, birds and beasts. (6)<sup>6</sup>

最初の“Natural History”は総称として大文字で固有名的に表され、その下位区分に“natural philosophy”(物理学、化学に相当)と“natural history”(生物学、地質学に相当)が置かれている。エマソンの「博物学」は広範な自然科学を採り入れ、まさにその点では、「植物学者」や「動物学者」のように専門分化するよりは「博物学者」であるが、19世紀の博物学が神の創造を前提とした人間への関心と結びついていたとすると、それよりも、当時の先端科学であった地質学の知見を基に、より現代科学的な自然と人間との関係に近づこうとしている。

この講演は続いて「自然科学」の教養を培うことの意義として、健康、有益な知識、喜び、精神と人格の向上、そして、何よりも重要で、まだ十分に行われていないこととして、人間を説明すること、即ち、それは「自然の法を知ること」だと述べる。「自然の全法則の全事実を知ること、存在の体系における人の真の場所がわかるだろう」(EL, 23)と言うように、エマソンの博物学は人間の意味を説明する科学的な「存在の体系」の記述を目指す。人間と外界との「対応」とは、外界の動いている自然物には「人間の精神」を「表現する力」があるということだと、スウェーデンボルグやコールリッジの象徴論を援用しながら、エマソンは「地質学や力学の公理は、倫理学の法則の翻訳に他ならない」と Natural History の効用を人間の「精神」の法を知ることだと定義する。この法は、翌 1834 年の講演 “The Naturalist” では “the laws of the Creation”(EL, 82) と言い換えられるように、自然を被創造物として、創造され同時に存在する静的なものとして捉えるというよりは、自ら動き創造していく “animated nature” として捉えている。その動きの第一原因を「法」と呼ぶとき、そこに宇宙創造の時間からの縦軸の通時的な関係への意識が読み取れる。

これらの講演が、エッセイ *Nature* に発展していくが、それに続く *Essays: First Series* (1842) の巻頭に置かれたのが、“History”と題されたエッセイであ

ることも Natural History の歴史への含意を暗示する。“secularity”は天文学と政治経済史の用語であるが、その両方の歴史への関心がエッセイ “History”には現れている。

## 1. エッセイ「歴史」

1835 年の博物学についての講演のために、エマソンは日記には以下のような考えを記している。

Natural history by itself has no value: it is like a single sex. But marry it to human history, & it is poetry. Whole Floras, all Linnaeus' and Buffon's volumes contain not one line of poetry, but the meanest natural fact ... applied to the interpretation [of] or even associated [with] a fact in human nature is beauty, is poetry, is truth at once.<sup>7</sup>

この “natural history” は明らかに、「人間の歴史」に対して「自然の歴史」と読まれる可能性を考えて使われているだろう。現代の博物館が「自然史博物館 (the Museum of Natural History)」を名乗ることには、ダーウィンが集大成した「進化」の概念が前提としてある。<sup>8</sup>ダーウィンの『種の起源』(1859) が主張するのは二つのことに代表され、それは多様な生物がごく少数の、或いは単一の祖先に由来するという「共通起源説」、その共通の起源から多様な生物が生じてきた方途を明らかにした「自然選択説」であり、そこから引き出されるメッセージは、「生物は長い歴史の所産である」ということであった。<sup>9</sup>ゲーテの生物学やフンボルトの宇宙学、ライエルらの地質学の著作に親しんでいたエマソンが 1830 年代に考えていたのも、自然発生に始まり「長い時間をかけてゆっくり変化する (secular)」進化論的な「自然の歴史」であった。

エッセイ “History” は “There is one mind common to all individual men.”(237)で始まる。エマソンは「歴史」をこの「精神」の働きの記録として捉えている。

There is one mind common to all individual men. Every man is an inlet to the same and to all of the same. He that is once admitted to the right of reason is made a freeman of the whole estate. What Plato has thought, he may think; what a saint has felt, he may feel; what at any time has befallen any man, he can understand. Who hath access to this universal mind, is a party to all that is or can be done, for this is the only and sovereign agent. (237)

「歴史」というタイトルから予測される編年的な記述から微妙に外れて、エマソンはプラトンや聖人と現代人との「共通の」、「同じ」、そして「普遍的な」精神の働き、いわば、「不易流行」の「不易」の記述を、「流行」の記述である歴史の真の意味として考えている。人はこの「普遍的な精神」の「代理人」或いは「具現」(237)として過去の歴史と関わっているので、「すべての歴史は主観的になる。言い換えれば、正しくは『歴史』はなく、『伝記[自伝]』だけがある」(240)と述べ、歴史の主体としての現代の人間をエマソンは前景化する。この現代人の「普遍的な精神」は、『エッセイ第一集』では“History”に続く章である“Self-Reliance”では、自分自身の思考を信じることを可能にする理論的基盤、他人も共有している霊的精神“genius”として同時代人の間でも重要な役割を果たしている。つまり、エマソンの“history”の概念には過去への関心よりも、エマソンの思想の根幹にある「同じ精神」の「博物学」的な蒐集という側面がある。

しかし、上の引用でも、そのような「共通の精神」を知る人は「全地所の自由市民になる」のような表現は、エマソンが同時代の奴隷問題に関心をもって示していること、実際、エマソンは「時代」にも大きな関心をもっている。エマソンの読書歴など知的関心を基に書かれた伝記 *Emerson: The Mind on Fire* はハーバード入学前後のエマソンがギリシア神話や聖書を歴史的な文脈で解釈する書に接し、ヘブライ語では詩人と予言者が同じ言葉で表されることに触発されたであろうこと、ハーバード大学でエマソンに最も影響を与えた

ギリシア文学者の Edward Everett は様々な宗教の生まれる歴史や個人の経験に目を開かせたであろうことを指摘している。<sup>10</sup> ユニテリアンを代表する牧師であり、エマソンの尊敬していた W.E. Channing はドイツで新しく起こった聖書への歴史批評を恐れていたが、にも拘らずドイツへ留学したエマソンの兄 William は歴史的、無神論的な批評を弟に伝えていた。William が薦めた読書には、Johann G. Herder の *Outlines of a Philosophy of the History of Man* (1784-91、英訳 1800) が含まれていた。<sup>11</sup>

ヘルダーの未完の大作 *History of Man* は、人間を太陽系の中、地球上に存在する生き物として、創造の力 “Power” とそれを宿す “Organ” の観点から説き起こす、宇宙創造論的な歴史を構想している。<sup>12</sup> 宇宙や自然の力が人間を形成し、人間の力に通じるという考えは、エマソンの考える「精神の力」につがる自然発達史的な歴史観と言えよう。エマソンの歴史がそのような科学的な “History of Man” を考えていることは、エッセイ “History” のはじめて個々の人間が宇宙の生成に連なる「普遍的な精神の体現」であることを説明する以下の表現にも示されている。

... as the poise of my body depends on the equilibrium of centrifugal and centripetal forces, so the hours should be instructed by the ages, and the ages explained by the hours. (237)

物理的な作用力を受ける身体にはや、宇宙的な存在としての人間の見方が垣間見える。”ages” という歴史的時間への言及は、この引用文の前に “There is a relation between the hours of our life and the centuries of time.” とあるように、人間の単位である時間と古代以来の歴史の「時」の単位である世紀を言い換えたものである。しかし、このエッセイは一人の「自伝」の中に歴史の「時」が現れるという例を様々に展開し、最後には、人間の歴史以前の動物、植物の時代へと遡っていく。前述のエッセイ「自然」の言葉で言えば、「自然の長大な周期性」の天文学的な時間のスケールで終わる。エッセイ冒頭の “ages” にもそのような長大な歴史の、それ以前の神話的な時間が暗示されている。

初期のエッセイと同時期にかかれたエマソンの詩には、自然と人間の精神との結びつきがより率直に表現されている。エッセイや講演ではその汎神論的な性格から聴衆の理解を得ることが困難であることを知り、「歴史」の例にも見られるように控え目に語られていた自然史の一部としての人間の歴史への関心は、1847年から48年にかけてのイギリスでの講演ではより明確に語られる。

## 2. 講演「知性の博物学/自然史」

2度目のイギリス旅行は、工業都市を中心にエマソン自身うんざりするほど多くの講演に迫られるものだった。その間、地質学者や鉄道技師から画家まで多くの著名人にも会い多忙な日々であった。 *Mind and Manners of the Nineteenth Century* と題された一連の講演の中で原稿の残っている講演に、Lecture I: “The Powers and Laws of Thought”、II: “The Tendencies and Duties of Men of Thought”、III: “The Relation of Intellect to Natural Science”がある。<sup>13</sup> 最初の講演には、タイトルに“History”でも論じられた「力と法」が含まれていることから推測されるように、“natural history”への言及が多い。ロンドンの The Literary and Scientific Institution の会員を前に、科学に関する講演の魅力を話の枕にした後、こう続ける。

Then I thought,---could not a similar enumeration be made of the laws and powers of the Intellect, and possess the same claims on the student? Why not? These powers and laws are also facts in a Natural History. They also are objects of Science, and may be numbered and recorded like stamens and vertebrae. At the same time, they have deeper interest, as, in the order of nature they lie higher and are nearer to the mysterious seat of power and creation. (137)

エマソンは形骸化した言葉に対して、地球物理を扱う科学のように物質的な実体をもつ言葉、ものである言葉を求めた。言葉はものと精神とが結びついたも

のであるべきだと考え、エマソンの精神は自然に向かい、両者は同じものであることを発見した。それを表現するような、未だ実現されていない「博物学というよりは自然史」を志向していることを“Natural History”に付けた不定冠詞は示しているだろう。上の引用でエマソンは植物の細部を記録する博物学から現代的な宇宙創造の自然史へと、Natural History の意味の振幅を語っているからだ。

まだ支持者の少ないことを認めつつ、“a natural history of Intellect”(139)の重要性を展開して、エマソンは“The history of intellect will be the best of all chronicles.”(147)と言っているので、“natural history”にも「博物学」ではなく「自然史」の側面を認めたい、新しい分野、「自然史博物学」を始めたいと考えていることが見え隠れする。自然の発達史の根拠となる「自然の長大な周期性」、その動因である原初的な「思考」が人間に具体化されたことについては、この講演では以下のように表現されている。

...The thought which was in the world, part and parcel of the world, has disengaged itself, and taken an independent existence.

But of those elemental organic thoughts which we involuntarily express in the mould of our features, in the tendency of our characters, there is no measure known to us. The institution draws all its solidity and impressiveness from the virulence and centrality of the thought. The history of the world is nothing but the procession of clothed ideas. (148)

「世界の歴史は衣装をまとった観念の行列に他ならない」と人間の歴史においても、観念があつて事物が現れること、それは、人間が世界や自然に先立って存在する「思考」の具現化であることに対応するとエマソンは考えている。エマソンがイギリスで会った地質学者ライエルは非キリスト教的な観念を含む自説の叙述の方法に慎重であつた。ダーウィンの進化論を先取りするようなエマソンの自然史が理解されにくいものであつたことは十分予想されることで、

このイギリスでの講演シリーズの第2回 “The Relation of Intellect to Natural Science” は、冒頭から人間の精神と自然との関係、“the Identity of the Intellect with Nature”を強調し、より自然史的な側面の強いものであったが、これが夢想家、壮大な絵空事を魅力的に語る人、という典型的なエマソン評につながった。1849年のアメリカでの講演は、メルヴィルがエマソンの虹にはのらないと言及した、逆さの虹にのって揺れるエマソンの風刺画を生むに至った。<sup>14</sup> この2回目の講演では1回目の講演で「衣装をまとった観念」と言及されたものはマホメット・アリ、ナポレオンなど歴史上現れた「知性」の人と言い換えられ、そのような天才的な人が間欠的に現れて世界を変えることを取り上げて、“This inevitable interval is one of the remarkable facts in the natural history of man.”(167)と述べている。ここにも「長大な時間をかけてゆっくり変化していく、自然の周期性」への意識があるだろう。

1870年代には、エマソンは未完に終わったハーバード大学での講演シリーズにも *Natural History of Intellect* の題を与えている。その際、或いは、その後と同題で出版するために、エマソンは昔の原稿を使い、イギリスでの講演原稿に1843年という間違った日付けをふったと講演集の編者は推測しているが、<sup>15</sup>それはまた、老年のエマソンが毫碌したということ以上に、「知性の博物学/自然史」がエマソンの生涯のテーマであったということを示しているだろう。Henry James, Sr.が “Mr. Emerson’s authority to the Imagination consists, not in his culture, not in his science, but all simply in himself, in the forms of his natural personality.”と述べていることも、<sup>16</sup> エマソンがいかに熱心に「科学」を語ったかを想像させる。もちろんそれは人間の精神の靈性を語るためのものであった。「博物学/自然史だけでは価値がない。それは単性のようなものだ」という考えも生涯変わらなかっただろう。

エマソンの科学的な自然観が同時代、後世にあまり伝わらなかったのは、ダーウィンが格闘しなければならなかった、そして、現在でも進化論がアメリカでは4割近い人に受容されないという問題と軌を一にしているだろう。地球の年齢は、神の創造に関わる大問題であり、後半生においては国民的アイコンにな

ったエマソンの講演が自然の創造の科学というよりは“Mind and Manners”のように社会的な主題の元で受容されていたことも理解できる。しかし、エマソンの人間の精神と自然科学とを結び付けるという姿勢は、古来優れて人間的な伝統であり、エマソンが先導した「科学」に対する姿勢、現代的な普遍性の追求は、注目されてもよい、現代の課題でもありうる。

注

1. Barbara Packer, *Emerson's Fall: A New Interpretation of the Major Essays* (New York: Continuum, 1982), pp. 28-29. 拙論「エマソンの『自然』における“Spirit”と“Genius”」（三重大学英語研究会 *Philologia* 第44号, 2013）pp.49-50 参照。
2. Ralph Waldo Emerson, *Poems: A Variorum Edition, Vol. IX of The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, eds. Albert J. von Frank and Thomas Wortham (Cambridge, Mass: The Belknap P of Harvard UP, 2011), pp. 12-13. “Each and All”, “The Rhodora”への頭注を参照。エマソンの科学への関心の重要性については、藤田佳子「エマソンと当時の科学—進化論を中心に」（奈良女子大学文学部『研究年報』第46号, 2002), pp. 5-18 から教示を受けた。
3. エマソンのエッセイの引用は、*Ralph Waldo Emerson: Essays and Poems* (Library of America College Edition), eds. Joel Porte, Harold Bloom and Paul Kane (New York: The Library of America, 1996) による。
4. この問題は拙論、「“The Secularity of Nature”—エマソンのエッセイと詩—」（三重大学英語研究会 *Philologia* 第43巻, 2012）pp. 35-48 で論じた。
5. Merton M. Sealts, Jr. and Alfred R. Ferguson, *Emerson's “Nature”: Origin, Growth, Meaning*, Rev. ed. (Carbondale: Southern Illinois UP, 1979), p. 39.
6. Ralph Waldo Emerson, *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson, Vol. 1: 1833-1836*, eds. Stephen E. Whicher and Robert E. Spiller (Cambridge, Mass.: The Belknap P of Harvard UP, 1966).
7. Sealts and Ferguson, p. 41.
8. 山田格「自然史博物館の立場から」 松永俊夫(編)『ダーウィンの世界：ダーウィン生誕200年—その歴史的・現代的意義—』（学術会議叢書 17）財団法人日本学術協力財団 2011.
9. 小川眞理子「ダーウィンの生物学」、松永俊夫(編)『ダーウィンの世界』p. 64.
10. Robert D. Richardson Jr., *Emerson: The Mind on Fire* (Berkeley: U of California P,

1995), pp.12-14.

11. *Ibid.* pp. 49-51.
12. Johann G. Herder, *Outlines of a Philosophy of the History of Man*, trans. T. Churchill (London, 1800).
13. Ralph Waldo Emerson, *The Later Lectures of Ralph Waldo Emerson, Vol. I:1843-1854*, eds. Ronald A Bosco and Joel Myerson (Athens, GA: University of Georgia P. 2001).
14. *Ibid.* p.157.
15. *Ibid.* p.155.
16. Cornel West, *The American Evasion of Philosophy* (Madison, WI: The University of Wisconsin P, 1989), p. 9.